『あざ』におけるアダムとイブ

Adam and Eve in "The Birth-mark"

倉　橋　洋　子

序

Nathaniel Hawthorne が，"The Birth-mark" を書いた十九世紀のアメリカは，産業革命が進行している時代であり，自然科学全般も急速に発展しつつあった時期である。このような時代が反映されていると思われるこの作品の主人公 Aylmer は，Hawthorne の他の作品の芸術家，科学者と同様に，科学を至上とする理想家である。彼は，妻の Georgiana のあざを科学の力によって除去しようとする。彼のこのような行為に対して，Hawthorne は，彼特有の曖昧な表現方法を用いながらも，彼の意見を述べている。

先ず，"The Birth-mark" に出てくる人物，筋の展開等の構成を明らかにすることから，この作品を検討する。

I

Hawthorne の短編小説 "The Birth-mark" には，三人の人物が登場する。一人は科学者であり，最近結婚したばかりの Aylmer，一人は彼の妻の Georgiana，もう一人は Aylmer の助手の Aminadab という男性である。Georgiana は，彼女の左の頬にある小さな手の形をしたあざを除けば，非の打ちどころのない美しさの女性である。科学者の Aylmer は，妻のあざに対して結婚当初は無関心であったが，完璧な美しさを求めるあまり科学の力によってそのあざを除去しようという考えに取り付かれる。彼はこの考えに対して，偏執的であり，それに耐えられなくなった妻の Georgiana は，実験によってあざを取り除くことに同意する。あざは実験により消えるが，その直後 Georgiana は息をひきとる。

Hawthorne は，"The Birth-mark" の冒頭で，この作品を寓話とする意図があることを次のように述べている。"Such a union accordingly took place, and was attended with truly remarkable consequences, and a deeply impressive moral."[1] "such a union" とは，Aylmer の妻に対する愛情と科学に対するそれとの結合のことである。"The Birth-mark" の寓話性に関して，Harry Levin は，*The Power of Blackness* の中で次のように語っている。

1 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of* the *Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Uni. Press, 1974), X, 37.

> With a reference to the statue of Eve by the sculptor Hiram Powers, Hawthorne hints that his science-fiction retells the Bibilical fable, letting the birthmark stand for original sin and replacing the tree of knowledge by the apparatus of the laboratory. But the roles are now reversed; for it is Adam who yields to curiosity, and it is Eve who plays the consenting victim. [2]

Levin が "The Birth-mark" を科学小説と呼ぶのは，Hawthorne がこの作品において，科学者 Aylmer の実験装置あるいは，Aylmer の発明した薬品に関して多くのページを割いているためである。Levin は "The Birth-mark" については，多くは語っていないが，彼の興味ある解釈は，この作品が聖書の寓話を暗示しているという点にある。

Levin の語るところの聖書の寓話とは，旧約聖書の Adam と Eve のエデンの園追放の物語のことである。Adam と Eve はエデンの園において，始めは罪悪感がなく無垢であったが，禁断の知恵の木の実を食べることによって善悪を知るようになり，また神の言いつけを破って罪を犯したことにより，エデンの園から追放され現世の人間になる。Adam と Eve はエデンの園においては不死の存在であったが，追放された後は，死ぬべき運命をもった存在となる。

Levin の解釈によると，Adam と Eve の物語で示された人間には生来罪に落ち入りやすい傾向があるという原罪は，"The Birth-mark" の中では，Georgiana のあざに象徴されている。しかし登場人物の役割が男女逆になっているため，"The Birth-mark" はそのまま Adam と Eve の物語と重ならない。"The Birth-mark" においては，Aylmer は Eve の Georgiana は Adam の役割を果たしているのである。

"The Birth-mark" を，Levin の指摘するように Adam と Eve の物語の再現として読んだ場合，逆になっているのは，人物の役割のみに限られていない。Levin は指摘していないが，Hawthorne は，構成にもう一つ工夫を凝らし，この作品をさらに複雑にしている。Adam と Eve は無垢な状態から善悪を知り現世の人間となる。しかし，Aylmer と Georgiana は原罪を持った現世の人間であるにもかかわらず，エデンの園にいたころの無垢な Adam と Eve になろうとする。すなわち，Aylmer と Georgiana は，完全を求めて現世からエデンの園に入ろうとするのである。従って，"The Birth-mark" の話の筋は，Adam と Eve の物語の逆に展開することになる。

以下の章においては，Levin の解釈に従って，"The Birth-mark" を読むことが最も妥当であること，また，それに従って読んだ場合，筋の展開が旧約聖書の Adam と Eve の物語の逆になっていることを確かめ，さらに，Hawthorne が，このような構成にした必然性を考えてみる。

---

2 Harry Levin, *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe and Melville* (Alfred A. Knopf, 1970), p. 60.

II

Hawthorne が原罪の概念を持っていたということは，"The Birth-mark" 以外の作品にも表われている。"Minister's Black Veil" においては，牧師の Hooper は顔に黒いベールを被り，それを最期まで取ることはなかった。彼のベールは，彼の秘密の罪を象徴している。

"...and if I cover it for secret sin, what mortal might not do the same?"[3] Hooper 牧師は婉曲な言い方ではあるが，誰もが秘密の罪を持っていると語る。これは，すなわち，人間は全て罪を持っているという原罪の概念を示している。また，"Young Goodman Brown" においても，Brown の妻の Faith を始め，村の牧師，彼の祖先等，これまで，Brown が善良であると信じてきた人々は，皆罪人であった。人間は，生まれつき罪に落ち入りやすいという原罪の概念がここにも表わされている。

"The Birth-mark" においても，Georgiana のあざによって，原罪が象徴されている。

"It was the fatal flaw of humanity, which Nature, in one shape or another, stamps ineffaceably on all her productions, either to imply that they are temporary and finite, or that their perfection must be wrought by toil and pain."[4] Hawthorne は，あざを，神があらゆる創造物に付けた人間の致命的な欠点の印であると述べている。また，あざは，"the symbol of imperfection"[5] とか，手の形をしているために，"the spectral Hand that wrote mortality"[6] と表現されている。これらの表現によると，あざは，人間の欠点，不完全さ，死ぬべき運命を象徴している。すなわち，Adam と Eve の堕落によって示され，すべての人間が受け継いでいる原罪を，あざは象徴しているのである。

さらに，あざは Georgiana が緊張のために顔が青白くなると，その赤さが一層増し白い頬にくっきりと現われてくる。そのためあざは，"Crimson Hand"[7] とか "Crimson stain"[8] とその色を強調して大文字で書かれている。Hawthorne は，他の作品においても罪を象徴するものには赤い色を用いている。例えば，*The Scarlet Letter* において罪を犯した Hester が胸に付けた緋文字の A は，"the scarlet token of infamy"[9] と表現されているように，彼女の罪を象徴している。

---

3 Nathaiel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Uni. Press, 1974), IX, 46.
4 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, X, 38-39.
5 *Ibid.*, p. 39.
6 *Loc. cit.*
7 *Loc. cit.*
8 *Ibid.*, p. 39.
9 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Uni. Press, 1971), I, 63.

また，あざが，手の形をしていることも原罪と関連がある。"The Crimson Hand expressed the ineludible gripe, in which mortality clutches the highest and purest of earthly mould, degrading them into kindred with the lowest, and even with the very brutes, like whom their visible frames return to dust."[10] 赤い手の形をしたあざは，至高至純なものを掴みとってこれを低俗なものに堕落させ，元の塵に返らす運命，すなわち，死に至らせる運命を把握していることを示している。

このようなあざは，Aylmer の夢の中において，Georgiana の心臓を掴んでいる。"...its tiny grasp appeared to have caught hold of Georgiana's heart...."[11] 以上のことから，あざの手は，至高なもの，すなわち Georgiana の心臓を掴み，それを堕落させ死に至らせる運命に導いていると言える。Hawthorne が，あざに手の形を用いたのは，これらの把握をさせるためであり，原罪を象徴するあざは，他の形をもっては，その意図が達成され得ないのである。

Ⅲ

原罪を象徴するあざを持った Georgiana であるが，彼女は Aylmer から指摘されるまで皆無と断定してもよい程あざを原罪の象徴としては意識していない。それは，Aylmer から，"... has it never occurred to you that the mark upon your cheek might be removed?"[12] と尋ねられる時に，次のように答えることから判断できる。"To tell you the truth, it has been so often call a charm, that I was simple enough to imagine it might be so."[13]

ところが，Georgiana のあざは彼女の欠点の印で，Aylmer にとっては我慢できない存在であることを知るにつれて，彼女はあざを強く意識するようになる。

> Georgiana soon learned to shudder at his gaze. It needed but a glance, with the peculiar expression that his face often wore, to change the roses of her cheek into a deathlike paleness, amid which the Crimson Hand was brought strongly out, like a bas-relief of ruby on the whitest marble.[14]

これは，Georgiana が，あざを彼女の不完全の印として，意識し始めたことを，すなわちあざに対して罪悪感を持ち始めたことを示している。

---

10 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, X, 39.
11 *Ibid.*, p. 40.
12 *Ibid.*, p. 37.
13 *Loc. cit.*
14 *Ibid.*, p. 39.

さらに，Georgiana は，Aylmer が夢にまで彼女のあざを取り除くのを見たことを知り，とうとうとうあざを取る決意をする。"Either remove this dreadful Hand, or take my wretched life!"[15] Georgiana は上述のように半ば絶望的に決心する。しかし，Aylmer の執拗なあざへのこだわりと，それを取り除こうとする意志を，無視することができなかった Georgiana の Aylmer に対する愛情を見逃すことはできない。結局，Georgiana は，Aylmer の誘惑に負けたのである。

さて，Georgiana のあざは見る人によって異なって受け取られている。Georgiana の恋人達は，あざを，"the magic endowments that were to give her such sway over all hearts"[16] と受け取り，女性達は，"... the Bloody Hand, as they chose to call it, quite destroyed the effect of Georgiana's beauty, and rendered her countenance even hideous."[17] と評している。また，男性達からは，次のように思われている。"... if the birth-mark did not heighten their admiration, contented themselves with wishing it away, that the world might possess one living specimen of ideal loveliness, without the semblance of a flaw."[18] 以上のようにあざの受け取り方はいろいろ可能であるにもかかわらず，Aymer があざを次の引用で述べられているように，Georgiana の不完全の，あるいは罪の印として受け取るのは他人の欠点ばかりに捕われている Aylmer の高慢のためである。

> In this manner, selecting it as the symbol of his wife's liability to sin, sorrow, decay, and death, Alymer's 〔Aylmer's〕 sombre imagination was not long in rendering the birth-mark a frightful object, causing him more trouble and horror than ever Georgiana's beauty, whether of soul or sense, had given him delight.[19]

さて，Aylmer のように高慢故に，妻に満足できない人物に対して，Hawthorne は *The American Notebooks* の中で次のように述べている。"Those who are very difficult in choosing wives seem as if they would take none of Nature's ready-made works, but want a woman manufactured particularly to their order."[20]

ところで，Aylmer 自身の罪悪感に関して，Hawthorne は，明確な表現を避けている。しかし，Aylmer は一見自分自身の罪悪を意識していないような風を呈するが，現世の人間で

---

15 *Ibid.*, p. 41.
16 *Ibid.*, p. 38.
17 *Loc. cit.*
18 *Loc. cit.*
19 *Ibid.*, p. 39,
20 Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Ohio State Uni. Press, 1972), VIII, 20.

ある彼にも，やはり，Georgiana と同じように罪悪感がある。Georgiana が，Aylmer の実験室で彼の実験の失敗の記録を読んだことを知って，Aylmer は，Georgiana に次のように言う。"Georgiana, there are pages in that volume, which I can scarcely glance over and keep my senses."[21] Aylmer の言葉は，自分の失敗に対する罪の意識の表出である。Aylmer は罪悪感を持つが故に自分の不完全さを Georgiana から隠そうとするのである。

The Scarlet Letter の Dimmesdale 牧師も罪悪感を持つが故に，彼の罪を隠し，そのため一層自分の罪に対して悩む人物として描かれている。しかし，Aylmer は，罪を隠そうとするが故に，一層他人の表面に出た隠されない罪に気を取られる。この点において，Dimmesdale と Aylmer とは異なっている。結局，Dimmesdale と Aylmer とは，二人共罪悪感を持っているが，Dimmesdale は自分の罪のために悩み，Aylmer は他人の罪のために悩む人物である。

Ⅳ

Aylmer の実験室には工夫を凝らした科学装置や薬品が並んでおり，Hawthorne は，"The Birth-mark" に，当時人々が科学に関心を持ち始めたという時代風潮を織り込んだと思われる。その Aylmer の実験室の装置には，彼のこれまでの業績の結果，知識と科学の粋とが集められているという点において，Levin の言うように，実験室の装置を Adam と Eve の知恵の木に置き換えて解釈することが可能である。

Aylmer の実験室の装置が知恵の木ならば，実験を行うということは，知恵の木の実を食べることと結びつく。"The Birth-mark" において，Georgiana のあざを科学の力を利用して取り除こうとすることに，最初に興味を示すのは，Aylmer である。Aylmer は，結婚当初は Georgiana のあざに対して，ほとんど無関心であったにもかかわらず，それを高慢故に，罪の印として受け取るようになり，除去したいという欲望に駆られるのは，彼の科学に対する関心と関わりあっている。"His love for his young wife might prove the stronger of the two; but it could only be by intertwinning itself with his love of science, and uniting the strength of the latter to its own."[22] Aylmer の，妻と科学とへの愛に関して，Terence Martin は次のように指摘している。"Aylmer's love of science is a constant in the story, in terms of which his love for Georgiana will be defined."[23] Aylmer は，もちろん妻に対して愛情を持っているが，彼の妻への愛は限定されており，科学への愛の方が優勢であると言える。そのため彼は，あざを実験により除去

---

21 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, X, 49.
22 *Ibid.*, p. 37.
23 Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (College & University Press, 1965), p. 68.

し，彼の科学者としての成功を納めたという野心を持つのである。彼の実験は，彼の虚栄心を満足させるためのものである。

さて，旧約聖書において，知恵の木の実に興味を示し，自ら取って食べそれを Adam に与え，食べるように誘惑したのは Eve である。従って，完全を求め，また，科学への興味に身を任せ，Georgiana を精神的に追い込み，あざを取り除くことに同意させた Aylmer は，旧約聖書の Eve の役割を果たしていることになる。Aylmer の誘惑に負けた Georgiana は，Adam の役割を果たしていることになる。ここにおいて，Aylmer と Georgiana の役割は，旧約聖書の Adam と Eve のエデンの園追放の物語における人物の役割とは，男女逆になっていることが分る。Hawthorne が，男女の役割を逆にした理由には，彼の他の作品，"Minister's Black Veil", "Ethan Brand", "Rappaccini's Daughter", "The Artist of the Beautiful", "Drowner's Wooden Image" 等に登場する牧師，科学者，芸術家等の理想家達が全て男性であるという，Hawthorne 特有の人物の役割に対する傾向が考えられる。

ところで，エデンの園において，知恵の木の実を食べる以前に Adam は神から次のように警告されている。"But of the tree of the knowledge of good and evil, thou shalt not eat of it; for in the day that thou eatest thereof thou shalt surely die."[24] 神の警告にもかかわらず，知恵の木の実を食べた Adam と Eve は，その結果目が開かれて，善悪を知るようになるが，神の言いつけを守らなかったためにエデンの園を追い出され，原罪を持った現世の人間となる。旧約聖書の中の "... thou shalt surely die." という神の予言は，Adam と Eve にとっては，死ぬべき運命を持った存在，つまり，現世の人間になることを意味していたことになる。Aylmer と Georgiana の場合，実験の結果 Georgiana のあざは消え，Aylmer は実験の成功を非常に喜ぶ。しかし，その直後 Georgiana は息絶え，Aylmer の実験は失敗に終わる。Georgiana の死は現象としては，全く Adam と Eve の場合とは逆であるが，神の予言通りである。

結局 Georgiana は，彼女の原罪の象徴であるあざが消えることにより，知恵の木の実を食べる以前の無垢な Adam と同じ状態になる。しかし，それと同時に彼女の肉体は滅び現世の人間ではなくなる。Aylmer と Georgiana の行為は，現世からエデンの園に入ろうとして，Adam と Eve の逆の経路を辿ろうとしたことになる。しかし，現世の人間としては，不可能であったと言える。

V

"The Birth-mark" には，Aminadab というもう一人の登場人物がいる。彼は Aylmer の助手であり，Aylmer が人間の精神面を代表している人物であるのに対して Aminadab は

24 Gen. 3: 17.

人間の肉体的な面を代表しているように描かれている。さらに，Aminadab は，一見世俗的で，動物的で，彼の声は人間というよりはむしろ獣に似ている。そのため Robert H. Fossum に次のように言われている。"Aminadab, his laboratory assistant, embodies the primal physical nature which serves man's intellectual will;...." [25]

しかし，重大なことは，Aylmer が Georgiana のあざを取り除こうとする時に言うひとりごとの内容である。"If she were my wife, I'd never part with that birth-mark." [26] また，Aminadab は，Georgiana が死んだ時に，Aylmer が不可能なことを求めて失敗したことに対して笑う。これらのことから，Aminadab は Aylmer の実験以前に，実験の結果を知っていたと想像される。Aminadab は，不可能なことを求めず，あざを人間の原罪としてそのまま受け取っており，完全を求めて妻を死に追いやった理想主義の Aylmer よりも現実を見る目があると言える。Hawthorne は，*The American Notebooks* の中で Aylmer に関して，創造主を征服するようなものを求める人物であると次のように述べている。

> A person to be in the possesion of something as perfect as mortal man has a right to demand; he tries to make it better, and ruins it entirely.
>
> A person to spend all his life and splendid talents in trying to achieve something naturally impossible, —— as to make a conquest over Nature. [27]

以上のような点から考えると，Aminadab は，Hawthorne の意見を代弁している面があると言える。

Aylmer のように，他人の原罪を認めようとしないで，不幸になった人物は，Hawthorne の他の作品の中にも見られる。"Young Goodman Brown" の Brown は，妻や村の人達の罪を知った後でも，それを認めることが出来なかったために，人間不信に落ち入り，一生を懐疑的に過ごす人物として描かれている。

結局，Hawthorne は，"The Birth-mark" において，人間が生来持っている原罪の象徴であるあざを取り除いて，完全にしようとする行為は，人間を破壊することであるということを，Georgiana の死をもって，示している。人間は生きている限り原罪から解放されることはない。現世の人間のままでは，エデンの園にはもどれないのである。つまり，罪は罪として

---

25 Robert H. Fossum, *Hawthorne's Inviolable Circle: The Problem of Time* (Everett/Edwards, inc., 1973), p. 79.

26 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, X, 43.

27 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, VIII, 165.

認めることが，Hawthorne の語るところの "profounder wisdom" [28] に達することであり，それによってのみ人間は幸せになりうるのである。

従って，Hawthorne が，この作品を，Adam と Eve のエデンの園追放の物語の逆に筋を展開させたのは，原罪を持った現世の人間が無垢な人間になろうとする神を征服するような理想を追求することは，死に至る不可能なことであるということを強調するためであったと思われる。

参 考 文 献

Fick, Leonard J. *The Light Beyond: A Study of Hawthorne's Theology.* Westminster: The Newman Press, 1969.

Fossum, Robert H. *Howthorne's Inviolable Circle: The Problem of Time.* Florida: Evertt/Edwards, inc., 1973.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne.* Vols. I, VIII, IX & X. Ohio State Uni. Press, 1971-1974.

The Holy Bible. King James Version; Celveland: The World Publishing Company.

Levin, Harry. *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe and Melville.* New York: Alfred A. Knopf, 1970.

Martin, Terence. *Nathaniel Hawthorne.* New Haven: College & University Press, 1965.

McPerson, Hugo. *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination.* Montreal: University of Toronto Press, 1971.

28 Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne,* X. 56.